

## 神は命をどのように見ておられるのでしょうか

エホバは万物の創造者です。創造物の中でも、とりわけ奇しいのは生き物の誕生でしょう。動植物を別にして、理知ある被造物である霊者だけでも数億人以上いると言われていています。聖書には「霊の体」という表現が出てきますが、ある時点にある場所に存在する事には違いなので、確かに「体」と言えるものがあると考えられますが、非物質の「体」についてはやはり、理解の限界を超えます。

やはりここは解りやすい人間の「体」について考えましょう。

今ここでこう書いているのは「命」とは何かを追求してみたいからです。

神が創造された最初の人間アダムは、造られた直後は生きていませんでした。といっても「死んでた」というわけでもありません。

人間を物理的に（つまり「体」を）造り終えた後、もう一つ、創造とは別の工程というか処置が必要でした。

**（創世記 2:7）「エホバ神は地面の塵で人を形造り、その鼻孔に命の息を吹き入れられた。すると人は生きた魂になった。」**

アダムが生きている人間になるためには「命の息」が入れられる必要がありました。

この行為は「創造」の範疇には入らないと私は考えています。

これは、たとえば、天地創造記述の中のヘフライ語「バラー」と「アサー」の違いと同様でしょう。具体的な例を挙げるなら、次の聖句です。

**（創世記 1:16）「そして神は二つの大きな光体を、すなわち大きいほうの光体は昼を支配させるため、小さいほうの光体は夜を支配させるために造ってゆかれ、また星をも同じようにされた。」**

ここで「2つの光体を造ってゆかれ」と訳されている部分に用いられている語は「アサー」であって「初めに神は天と地を創造された。」に用いられている、「創造」は「バラー」という語が用いられています。

（ちなみに新世界訳は「バラー」を「創造」、「アサー」を「造る」という言葉で訳し分けています）太陽と月は、この時点で創造されたのではなく、それより過去に創造され、すでに存在していた太陽の光が、地球の大気が澄んでゆき、地球の自転に伴って地上から、はっきりとそれと認識できる段階に至ったことを「二つの大きな光体を造られた」と表現しているのです。

少し話が横道にそれた感じですが、ここで言いたいのは、創世記 2：7の記述はこういうことであろうと考えられるということです。つまり

『アダムが塵から創造（バラー）された後、命が吹き入れられて生きた人が造られた（アサー）』なぜ、こうした説明になるかというのと、「命」は「命の源」である神から移されたものであるということを明確に理解しておきたいからです。

「命」を意味する「血」を食べてならない、という禁令からも判るように、「肉」や「青物」は与えられましたが、「命」は与えられているものではないということです。人に与えられているのは「命」の、いわば使用权であって所有権ではないのです。ですから、命に関して責任を問われることとなります。

(創世記 9:3 - 5)「緑の草木の場合のように、わたしはそれを皆あなた方に確かに与える。ただし、その魂つまりその血を伴う肉を食べてはならない。さらにわたしは、あなた方の魂の血の返済を求める。すべての生き物の手からわたしはその返済を求める」

人が死ぬと霊つまり生命は、なんと律儀なことに、もれなく神の元に返ってゆくことになっています。

「命」は買ったものでも、親からもらったものでもなく、単にシステム的に受け継がれて来たものでもなく、レンタルされているものなのです。

「エホバは万物の作り主」という言葉を最初に挙げましたが、神が創造されなかったものがあります。言うまでもありませんが、それは神ご自身です。そして、そのうちにある「霊」あるいは「命」は創造物ではありません。

さらに言うなら、「神の像」と表現されているもの、また神性、神の「特質」と言われているものなども皆、創造物ではありません。

「命の与え主」という表現が使われますが、厳密に言うとそれは間違いだということが判ります。あえて言うなら神は「命の分け与え主」もしくは「命の貸主」というべきで、アダムに分け与えられた「命」が肋骨を通してエバに受け継がれ、そして全人類に分け、貸し与えられ続けてきたのです。

さて、実はここからが本題です。

神は実際のところ、被造物の「命」をどう見ておられるのでしょうか？

神にとって「命」が貴重なもの、神聖なものということを示す記述は随所に見られます。

(マタイ 10:29)「あなた方の父の[知る事]なくしては、その一羽も地面に落ちません」

(エゼキエル 18:31 - 32)「あなた方の犯したすべての違犯を自分の身から振り捨て、自分のために新しい心と新しい霊を造れ。イスラエルの家よ、どうしてあなた方は死んでよいだろうか。『わたしは死んでゆく者の死を少しも喜ばないからである』と、主権者なる主エホバはお告げになる。『それゆえ、あなた方は自分を立ち返らせて、生きつづけよ』」。

しかし、実際には、古代において大勢の人が神の裁きで死に、エホバの後ろ盾を得た戦争で敵の兵士の多くが殺されました。そして結局ところ、これまでに生きたすべての人間はアダムからの罪のゆえ死にました。

病気や事故で若くして死んだ人、生まれてすぐに死んだ赤子、天災で死んだ人、犬死のような死に方をした人も少なくないでしょう。

ただ、それらの人々に対して、「復活」というプログラムが用意されています。

これは、やはり命は尊いものだということでしょう。

ヨナ書の中に「生きとし生けるもの」へのエホバの深い思いが、ヨナに対して教え諭す仕方でも語られています。

(ヨナ 4:11) …わたしとしても、大いなる都市ニネベを、右も左も全くわきまえない十二万以上の人々に加えて多くの家畜もいるこの所を惜しんだとしても当然ではないか…」

ところで、今、世界の人口は、1分間に140人ずつ、増えています。

当時のニネベの人口12万人が生まれるのに857分必要です。つまり14時間ちょっとです。わずか14時間で満たされる人数の人々を悔い改めさせ、命の貴重さをヨナに教えるために、そしてそれを記録して今日の私たちに教えるためになんとと言う労力がつき込まれたのでしょうか。

ともかくエホバはそれらの人々を惜しまれました。しかしそれらの人々も他の人と同様、死にたえました。

さて、復活についてもう少し話を進めたいと思います。

一度限りこの世に生を受けた人、たとえばここに一人の人(Aさん)がいます。彼は生まれてきた人は死ぬのが当たり前、復活など聞いたことも考えたことも当然一度もありません。

このAさんをエホバは覚えていて復活させる予定をもっておられます。どうしてでしょうか。どれほどその人が優秀で、有用で愛すべき特質を持っていたとしても、今後幾らでも似たようなタイプの人生まれてくるのです。あるいはどの点から見ても非の打ち所のない人が、これから無尽蔵に生まれてくるのです。ここでいくらこんな言葉を繰り返したとしても、復活の取り決めの価値をいささかも減じさせることはないのです。どうしてでしょうか。

それは、一度限りこの世に生を受けた人は、やはりその人以外の誰でもないというのが、エホバのお考えでしょう。

ただ、その人が永遠に失われるのが惜しいからです。

単に「命」が惜しいではありません。Aさんが惜しいのです。そうです、エホバにとって誰とも違う「あなた」がいとoshiiのです。

人間がどれほど多くなっても、その数に応じて、その関心や思いが薄くなるということはありません。子供を持っておられる方なら、一層よくわかりますが、3人であろうが5人であろうが、その一人一人に対する思いが1/3や1/5になつたりはしません。これが子供に対する親心で、同様に人に対する神心です。

文字通り無数にある星々を「その名で呼ばれる」神はその一つ一つに名前をつけておられるということです。

もちろん太陽のように絶対不可欠な星もありますが、塵の塊のような星も無数にあるのです。神の像に造られた人間は無生の星とは比べ物になりません。

なにしろ「我が子」のひとりですから、何人いても、何十億人、何千億人いても一人一人が「我が子」なのです。

羊飼いいエスはご自分の羊を名前を呼んで導き出すと書かれていますが、エホバはあたかも名前を呼んで人をハデスから呼び起こされるのでしょうか。

エホバは人格神と言われていています。単なる力の象徴ではなく、人格をもたれる神であるということです。それで神の様々な特質の中で、とても人間らしいところがあると私は思っています。もっとも、本当は神に人格があるのではなく（神に人間の性格があるのではなく）、人間の方に神格がある（人は神の像に似せて造られたのですから）というのが正しいわけで、本来なら神を人格神と呼ぶのではなく、人を神格人と呼ぶべきなのだろうと思います。

ですから人の内にある「人間味」と表現される人間らしい部分は実は神らしい部分なのです。さて、その神の人間らしい特質と述べたのは、「愛着」という特質です。「公正で偏りみない」という属性を持たれるという知識を持って聖書を読むと、時々「？」と感じる記述に出くわすことがあります。実際、ある特定の人物に対する特別な思い入れを強く感じさせる箇所は随所にあります。

たとえば、次のような聖句です。

(イザヤ 46:3 - 4)「わたしに聴け。ヤコブの家よ、イスラエルの家の残ったすべての者よ、腹の時からわたしに担われた者たち、胎の時から運ばれた者たちよ。人の老齢に至るまでもわたしは同じ者であり、人の白髪に至るまでわたしが負いつづける。わたしが必ず行動するであろう。わたしが運び、わたしが負って、逃れさせるためである。」

人間が普通に考える以上にエホバは愛着という特質を強く示しておられるように思います。復活の取り決めは、公正さや命が惜しいという以上に、その一人一人に対する個人的な愛着のゆえんに他ならないものでしょう。

しかし、まもなく到来するハルマゲドンの時に、ほぼ全人類が永久に滅ぼされることになっているそうです。エホバの証人の教理ではそう言うことになっています。

仮に、この体制が後 10 年続いてハルマゲドンがあると仮定しますと・・・

エホバの証人の伝道者が現在と同じ増加率で増えたとすると 10 年後には丁度 800 万人位になります。

そして世界人口は 10 年後には、およそ 75 億 4600 万人くらいになると言われています。エホバの証人のうちの忠実を保った人だけが、保護されて終わりを生き残るとされていますが、今はここで、仮に伝道者全員が救われるとすると、樂園に生き残るのは、わずか 800 万人、人口の 0.001%。

実数で言うと75億3800万人が永久に消滅します。

生き残る見込みのある私は何という特権なんでしょう。と改めて実感して大喜び？ できますか？ 本当に？

それとも、これまで見て来た、エホバの命に対する思い、人に対するいとおしく感じる愛着を考えると、「エホバよ、あなたは本当に変わらない方なのですか」

と尋ねざるを得ないと感じるのでしょうか？

聖書から知るエホバとこの滅びの話はあまりにもかけ離れ過ぎていますから。

「右も左も全くわきまえない十二万以上の人々を惜しんだとしても当然ではないか…」と言われるその方は75億3800万人を本当に惜しまれないのでしょうか？

さて、世界人口のことからもう少し別の点を考えましょう。先ほども取り上げましたが、今、世界の人口は、1分に140人、1日で20万人、1年で8千万人、増えています。

最近10年間の伝道者の実際の増加は平均で1年間に11万7500人くらい増えています。

1日あたり322人弱の増加です。これを世界人口増加率と比べますと、その1日の間に世界人口は20万人も増えているのです。

1年経って伝道者が12万人増えて喜んでいたとしても、その間に世界人口は8千万人も増えているのです。

これをもっとも的確な日本語で10文字以内で表してみてください。

「焼け石に水!？」という言葉が脳裏に浮かんだかもしれません。

物理的に文字通り「人の住む全地」に達したとしても、現状のこの業によって「あらゆる人が救われて真理の正確な知識に至る」という神のご意志がなされる可能性は0に等しいといって過言ではありません。仮に全員が「かいたくしゃ」になったとしても何の変わりもないでしょう。正確な実態の把握と適切な評価を下すためには、成そうとしている目的という観点から捉えなければなりません。

最終的に何が成し遂げられねばならないかを明確に見極めれば、ある業、その方法、その組織のあり方、が成功しているか、失敗しているかが明らかになります。

この数字上の現実時は時間が経てば経つほど成就から遠のいてゆくということを物語っています。

「あらゆる国民に対する証しのために、人の住む全地…」という表現は単に全地球を回ればという意味ではなく、実際に人に達するということです。ですから、成果の観点から言って未だに何ら成就しているとは言えませんが1年後、5年後、10年後・・・となってゆくと天文学的に不可能になって行きます。その業も、その方法も、完全に「失敗」しているという明確な事実です。成果がなければ成就とは言えません。

この24:14で言われている「それから終わりが来る」直前に行われる伝道活動は、現実の成就という観点からだけでも未だその時は訪れていないというのが、現実を直視した結論です。あなたのビジョンは本当に聖書の言葉、その預言、とりわけ、「命」に対する神の特質とまったく調和していますか。